第１章　高次脳機能障害者の相談支援の基本

相談支援は、支援を必要とする人を発見し、サービスや支援ネットワークにつなげていく重要な役割を担っています。本人・家族も障害を認識しにくい高次脳機能障害者支援では、支援の導入部分として相談支援の役割が大切となります。

また、高次脳機能障害者に必要とされるサービスの内容や量は、その時々の障害状況や家庭などの社会的環境などに合わせて変わっていきます。本人・家族の状況に合わせて多様なサービスを活用し、安定した社会生活を続けるためには、継続した相談支援を行い、サービスの調整をしていくことが大切になります。

1　相談場面で配慮すること

（1）本人・家族の置かれている状況を理解する

混乱や不安の中にいることを理解し、話をよく聞く

相談者の混乱や精神的な疲労が強いときには、情報提供よりもまず話を十分に受け止めてもらえたという事実が大切なことがあります。本人・家族は思いがけない病気や事故による障害のため、混乱や不安の中にいることを理解して関わりを持つようにしましょう。

継続した長期間の支援が必要になる

障害による突然の本人の変化を前にして、本人･家族は現状を受け入れられず、支援やサービスの利用を決めることに時間がかかる場合があります。継続して相談しやすい関係を作ることが大切です。

本人の表現をサポートする

本人は、相談内容を整理して、ニーズを適切に説明することが難しくなっています。本人の訴えを要約して伝えたり、質問の工夫をしながら、本人の表現をサポートする面談を心がけましょう。

本人の疲労に配慮する

高次脳機能障害者は、特に考える作業をすることで疲れやすくなります。話の内容を理解したり、質問の内容に応えるために思い出したり、自分の意思を伝える作業などはとても労力を伴います。会話の内容がズレてきたり、イライラするなど疲れてきた様子が見られたら、休憩を取るなどの配慮が必要です。

（2）相談の内容を整理する

本人の生活状況を具体的に把握する

本人は自己の状況について客観的に把握したり、振り返ることが苦手になるため、実際の障害状況と本人の障害認識が異なる場合があります。電話や面談時の言動、身体状況だけで判断せず、具体的な生活状況を把握してから支援方法を検討しましょう。訪問による状況把

握も有効です。

発症・受傷後の経過や障害に対する考え方を把握する

障害状況のほかに、発症・受傷後の経過や本人・家族の障害の認識によっても支援の課題や必要とされるサービスが変わってきます。「発症・受傷後にどのような生活をしていたか」、「どのようなサービスを受けていたか」、「どのような症状で困っているか」、「障害についてどのように感じているか」、「今後の希望」などをできるだけ具体的に聞きましょう。

家族や周囲の人の話も参考にする

本人は自分の障害状況を十分に認識できず、先に家族が変化に気づき相談に訪れる場合が多くあります。また、本人と家族の困っていることや必要と感じている支援が異なる場合があります。生活を共にしている家族などの意見も聞き、支援内容を検討することが大切です。

(3) 情報提供の仕方に配慮する

内容を整理して伝える

相談内容から抽出された課題を整理し、現在、置かれている状況やするべきこと、利用できる社会資源、今後の長期的な見通しなど、内容を整理して伝えることが大切です。

後から確認できるメモや資料を渡す

話を聞くだけでは理解が不十分になりやすく、情報を誤って認識してしまう場合があります。大事な内容は図や絵を使って説明したり、後から本人・家族が内容を確認したり、関係者などに説明がしやすいようにメモや資料を渡すことも有効です。

【高次脳機能障害のある方との面談時の支援者の配慮】

- 面談の際は、できるだけ落ち着ける静かな環境を用意してください。
- 1 回の面接につき、一つの話題で行ってください。
  (複数での面談では、話の内容を要約して順序立てて伝えるキーパーソンを決めると話の理解がしやすくなります。)
- 質問は、なるべく短く、簡潔な文で行ってください。
  (場合によっては、二者択一や Yes・No で答えられる内容にします。)
- 絵や図、写真、メモなどを用いた説明が有効な場合があります。
  また、地名や知人の名前などの固有名詞は漢字で書いた方がわかる場合があります。
- 相手の表情やしぐさなどを見て、話の内容を理解しているか確認しながら話をしてください。
- 本人は内容を理解してから、回答するまでに時間がかかります。ゆっくりと話し、時間に余裕を持って対応してください。
- 大事な内容はメモを書いて渡すか、またはメモを取ってもらいます。(記入者名、記入日時、連絡先を記載します。)
- 書類の記入は、一項目ずつ案内します。
- 重要事項は最後に再確認してください。
  (大事な箇所は目立つように印をつけることも効果的です。)

2 情報収集のポイント

(1) 原因疾患を確認する

脳卒中や脳外傷などの脳損傷の既往があることを確認します。

⇒ ＜参照＞ “高次脳機能障害”の有無を考える手順について（P23）

高次脳機能障害の診断がなされているかを確認します。

(2) 発症・受傷からの期間を確認する

発症・受傷からの期間によって、本人の状態や障害の認識、本人・家族のニーズが変化していきます。また、利用できる制度も異なるので、発症・受傷から、どの程度日数が経過したのかを確認します。⇒ ＜参照＞高次脳機能障害のある方の支援の流れ（P6）、第３章　高次脳機能障害者の支援の流れ（P24 ～）、高次脳機能障害者の制度利用確認シート（P75）

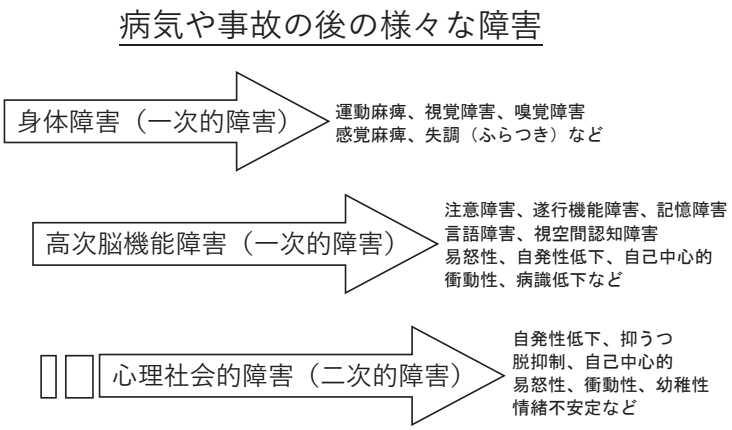
(3) 障害および日常生活の状況を確認する

脳損傷の後遺症として、人それぞれ、障害の程度や内容は異なります。脳の損傷によって、一次的（直接的）に、運動障害や感覚障害、ふらつきや複視といった、「身体の障害」と、注意障害や遂行機能障害、感情のコントロールの障害といった、「高次脳機能障害」が生じます。そして、さらに、二次的障害として、社会から孤立した、自分を誰も認めてくれない、話が通じないなどの「心理社会的障害」が生ずる可能性があります。（下図「病気や事故の後の様々な障害」参照）

これらの点を考慮して、障害および日常生活状況を確認していきます。

適切なサービスや支援の検討のために、１日の生活リズムや介助（指示のみも含む）の内容、移動方法や移動の自立（屋内、自宅の近隣、電車・バスの利用など）の程度などの日常生活状況を具体的に確認します。

また、支援にあたっては、てんかんなどの合併症や既往の疾患（高血圧、糖尿病、精神疾患など）への配慮も必要になります。現在はどこの医療機関で、どのような治療を受けているかを確認します。



(4) 本人・家族のニーズを明確にする

本人は障害により、現状を把握し、ニーズを整理して伝えることが難しくなっています。また、本人と家族のニーズが異なることもあります。時間を十分に取り、それぞれが何を必要としているのか、何が問題なのか、ニーズを明確にすることが大切です。

様々なニーズがありますが、以下のような内容が多いでしょう。

□ 高次脳機能障害の診断・評価について （第 2 章 P18 ～参照）
- 自分（家族）は、高次脳機能障害があるのか知りたい。
- 発症・受傷時から長期間を経過しているが診断は受けていないので診断を受けたい。

□ リハビリテーションについて（第 3 章 P26 ～参照）
- 高次脳機能障害者のリハビリテーションについて知りたい。
- 現在、家庭で実施しているリハビリテーションの方法が適切か知りたい。

□ 対応方法について （第 2 章 P9 ～、第 3 章 P30 ～参照）
- 家庭内で、暴言や暴力があるがどのように対応したらよいか知りたい。
- 記憶に障害があるが家の中での対応で工夫できることがあるか知りたい。

□ 在宅生活や社会参加について（第 3 章 P30 ～参照）
- 退院後は、家族としか関わりがないので、他者と接する場が欲しい。
- 本人のみで、通院や通所ができるようになって欲しい。

□ 就労（就学）の支援について（第 3 章 P36 ～参照）
- 復職を希望しているが、以前の仕事ができるか心配だ。
- 復職（復学）したが、仕事（学業）や人間関係がうまくいかない。
- 新たに就労をしたいので、支援を受けたい。

□ 福祉関係の制度・サービスに関する情報について（第 6 章 P62 ～参照）
- 高次脳機能障害で障害者手帳が取得できるのか知りたい。
- 金銭管理ができないので、支援をお願いしたい。

□ 各種給付・補償などについて （第 6 章 P68 ～参照）
- どのような経済的保障があるのか知りたい。
- 交通事故後の賠償問題などについて相談したい。

□ 当事者・家族会の情報について（第 4 章 P47 ～参照）
- 同じ体験をした当事者・家族と話をしたい。

(5) 障害に対する認識について確認する

ニーズをより明確にして、的確な支援につなげるためには、本人・家族がどのように障害を受け止めているのか、障害の理解・認識についての確認も重要です。

現在の生活の困難さと障害との関係についてどのように感じているか、主治医からどのような説明を受けているかを確認します。

(6) 発症・受傷前の生活状況について確認する

高次脳機能障害は中途障害です。発症・受傷前の生活状況について知ることは、障害が本人に及ぼす影響を的確に把握するために必要です。また、発症・受傷前の生活経験を活かした代償手段や環境調整の検討も有効です。

(7) 現在の環境について確認する

本人を取り巻く環境についての情報収集も大切です。環境とは、周囲の人、物、制度です。適切な環境調整により障害が軽減したり、日常生活上でできることが増えたり、社会参加が進むなど生活の質の向上が期待できます。

【環境の例】

○家族や周囲の人の高次脳機能障害への理解と対応は適切か。
○住環境は適切か。
○作業環境、作業内容は適切か。
○周囲には家族以外にどのような支援者がいて、どのような関わりをしているか。
○症状に合わせた適切な医療機関を受診しているか。
○どのようなサービスを利用しているか。
○当事者・家族会活動へ参加しているか。

【参考】 高次脳機能障害者が行政窓口や手続きで困ること

○役所からの手紙が読めない、手続きができない。
○電話での用事の意味がわからない。
○思うように言葉が出ず、意思が伝わらない。
○注意障害があり、人がいると集中できない。
○手続きに窓口に行き「今度、○○ごろいらっしゃい」と言われたが忘れてしまい、手続きができなかった。

「平成 18 年度　東京都高次脳機能障害者支援ニーズ調査」より

高次脳機能障害のある方の支援の流れ

発症
受傷

○意識状態の改善
○生命維持に必要な全身状態の安定化

医療機関における リハビリテーション

○主として起居、座位、立位、移乗、歩行、食事、排泄などの基本的な身辺処理動作や日常生活動作の改善
○高次脳機能障害の評価および認知機能の改善

在宅生活の再開と安定

【安定した生活の継続および生活範囲の拡大に向けた生活能力の向上】

○生活リズムの安定
○心身の耐久性の向上
○在宅での身の回りの動作の再獲得
（トイレ、着替え、入浴など）
○生活に関する動作の再獲得
（買い物、家事外出、公共交通機関の利用など）
○生活を管理する力の再獲得
（金銭管理、服薬管理、スケジュール管理など）
○再発防止に配慮した生活習慣を身につける
（食事、服薬、休養、通院など）
○コミュニケーションスキルの再獲得
○自己の障害の特徴を知る
○代償手段や社会資源を活用する
○社会資源の活用

再び働くための準備

復職・就労

＊環境の変化、新たな目標設定などにより再度このプロセスをたどることもあります。

【職業生活の継続のために必要なスキルの向上】

○疲労時に休憩を取るなどの対応ができる
○自己の障害の特徴を理解し、必要な時は周囲に支援を求められる
○働く体力と持久力がある
（一般就労：往復の通勤+4～8時間×5日間）
○通勤が自立している
○職場内での行為（移動、食事の準備、食事、トイレ、持ち物の運搬など）が自立している
○自己の障害の特徴に合わせた代償手段（メモリーノートなど）を活用して仕事ができる
○職場のルールに沿った行動ができる
○職務内容を規定の時間内で行える
○個々の状態に合わせた働き方を検討する

生活能力は、発症・受傷から半年、１年、３年と年単位でゆるやかに改善していきます。
あせらず、ゆっくり、少しずつ体験を積み重ねていきましょう。